

口縁部は大きく開く。胴部・口縁下部に便化した櫛齒状工具による施文を見る。堺は有蓋式で、胴部はやゝ偏平。甕は口径20cm程度の小形品と70cmを測る大形品の2タイプがある。口縁下部に便化した波状文・平行の条線文を施す。裏面には同心円の叩文を施す。

意義 蓋坏等の器形の特徴、全体の器種の組合せから芝窯址との出土品の編年的位置を考定すれば、およそ以下のようになる。まず通例に従って山陰地方須恵器編年の大綱ともいべき山本編年に照せば、第Ⅲ期に含まれ、しかもそのより新しい小期の所産とみるのが妥当であろう。陶邑窯址群の田辺編年と対比すればTK209式が器形、器種構成においてもっとも近似するが、この型式にはすでに宝珠形のつまみを付した杯蓋があらわれていることを考慮すれば、芝窯址出土須恵器群中にはそのような器種・器形は存在しないからその相対的位置を若干古くみることも可能であろう。

2. 中塚窯址群 (t 11)

遺跡の概要 中塚窯址群は2基の窯址によって構成される。いずれも土地所有者亀地武夫氏が山丘の斜面を切り開いて畑地を造成した際に発見、そのまま大半を破壊し去ったものである。うち1号窯の発見・破壊は早く、武夫氏の母堂の話によれば少なくとも昭和初期以前のこと、「中が真黒になったトンネル状の穴があった」とのことである。この言をうけて1957年に早稲田大学考古学研究室が調査し、燃焼部から焚口に至る窯体の残存部を検出した。

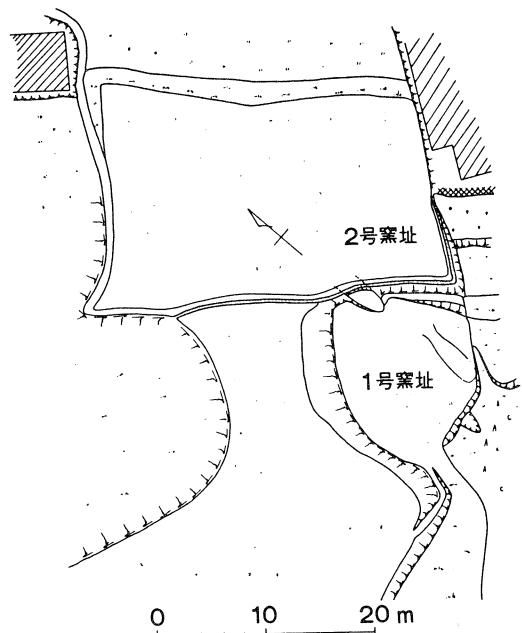
2号窯は1号窯の焚口より北3mの位置にあった。本窯は亀地氏がその所在を田中に通報され、焼成室の一部と煙道部分を調査することができたものである。

窯址群が営まれた地点は、水田面よりの北高15~20mで、山丘の東斜面に焚口をほぼ北東に窯尻を南西に置いている。1号、2号窯ともトンネル式の窯窯かと考えられるが確証はない。1号窯は窯体の総長約7m、焼成室幅1.75m、窯底傾斜30度前後のやや小形の窯と推定された。

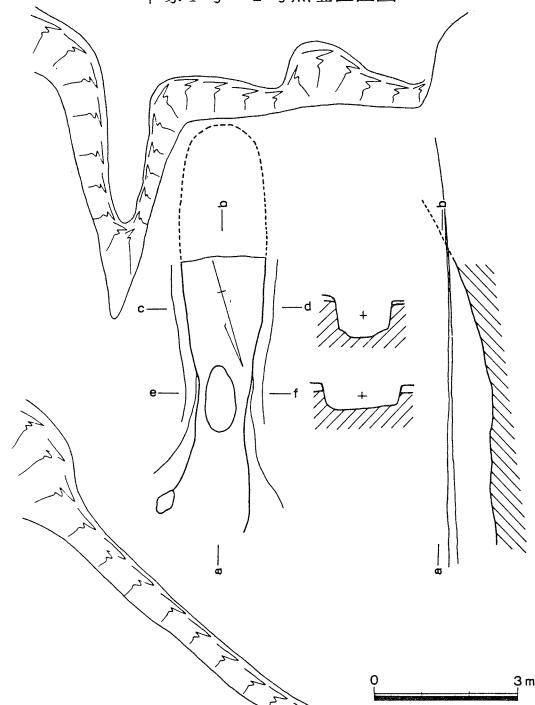
2号窯は規模は不明。僅かに残された側壁の湾曲具合、焼成室の天井の高さから芝窯址規模の窯体が想定される。窯の向きは1号窯と略同方向。なお2号窯は1号窯の造設・操業に際して廃棄されたものである。

出土遺物に関しては、1号窯の燃焼部と焚口付近から須恵器片が発見された他窯体近くの耕土中より須恵質の紡錘車が採集されている。

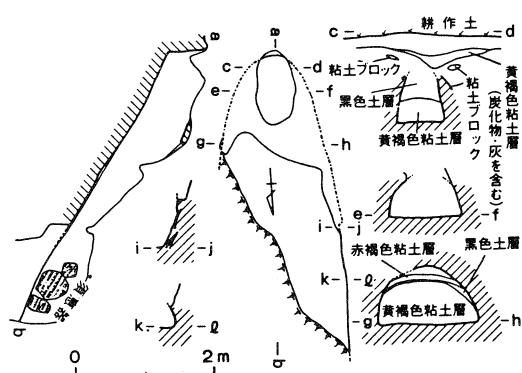
遺物 1号窯発見の須恵器には、蓋杯、高杯（高脚、低脚）、甕、有蓋短頸壺、大形甕等がある。各々の器形の特徴は芝窯址出土品に似るが、異なったものもある。その一は蓋杯身の受部の丈が低く、



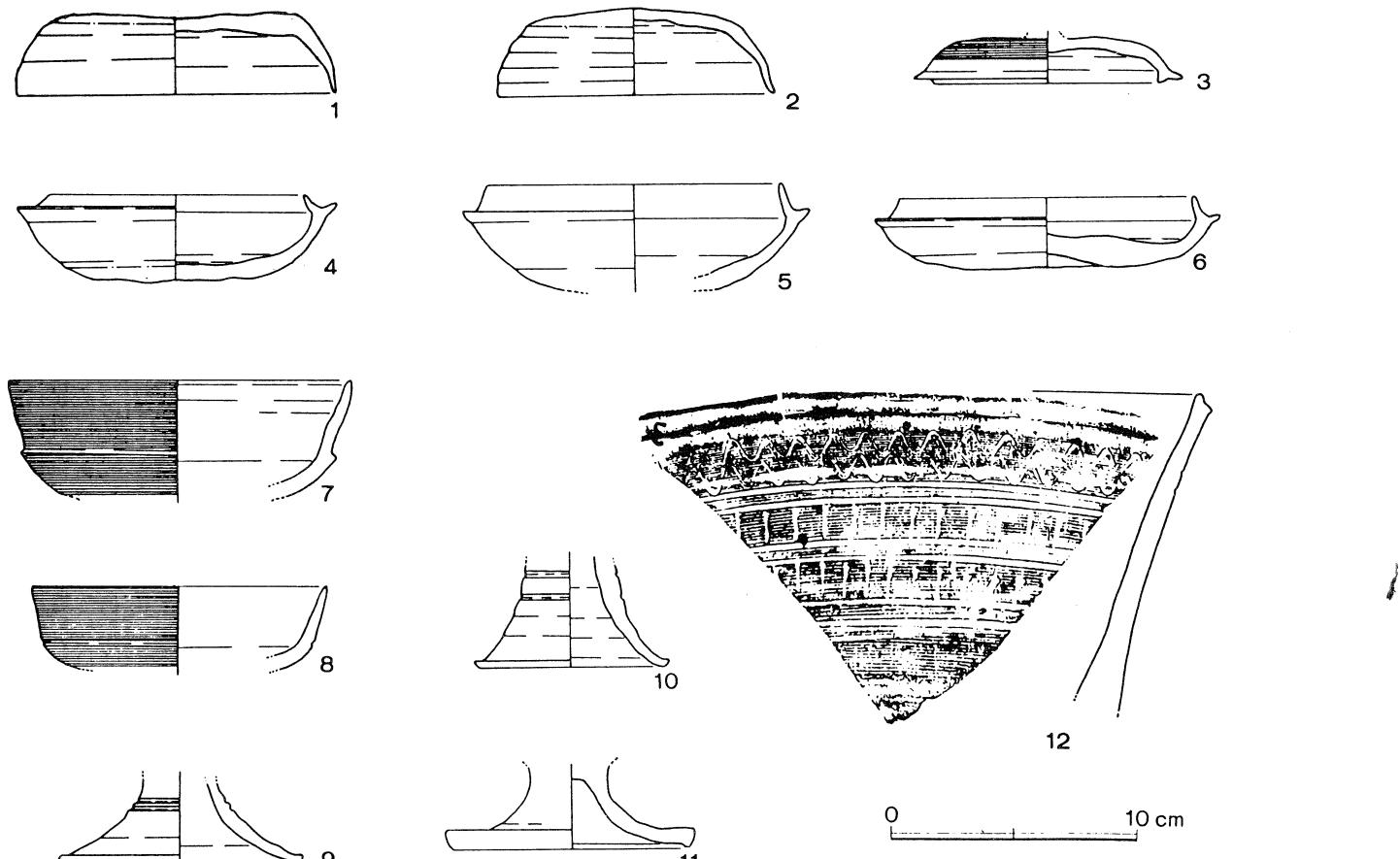
中塚1号・2号窯址位置図



中塚1号窯址実測図



中塚2号窯址実測図



中塚 1号窯址出土須恵器実測図・拓影

内傾し、断面が「Y」字形をなしている例がみられること、その二は乳頭状のつまみを付し、端部に身受の突出をもつ小形の杯の蓋があり、これとセットになる小形の無高台の杯が存在することである。その三は大形甕の口縁下の連續文がきわめて形式化していること等である。

意義 中塚 1、2 号窯址の発見は当地に一定期間継続して須恵器生産が行われたことを明らかにした。その上限期は芝窯址出土の須恵器によって、下限期は中塚 1 号窯出土品から推定されるであろう。いわゆる「蓋杯の身と蓋の形態が逆転した『かえり』と乳頭状のつまみをもつ蓋」、それとセットになる小形の無高台杯が陶邑 TK217 (古) 式、飛鳥 I 式において認められるとすれば中塚 1 号窯の相対的な年代は以上の諸型式に近い時点に求められるであろう。

3. 小 結

芝・中塚窯址群は 6 世紀後葉ないし末葉より 7 世紀の前葉にかけて営まれた須恵器の窯跡である。それは益田平野とその周辺に展開した古墳時代後期の群集墳の形成と結びついて操業されたものである。
(田中義昭)

文献 大川清・田中義昭・西垣丹三 「島根県益田市西平原窯址」『古代』29・30合併号 昭和33年

田中義昭 「益田市西平原窯址群の意義について」『ふい～るど・の～と』No.3 昭和57年

本片子遺跡 (t 39)

益田市遠田町

所在 遺跡は国鉄山陰本線石見津田駅からは西南方700mほどのところにあり、西の遠田川と東の津田川に狭まれた低丘陵に営まれたものである。遺跡のある山丘上からは津田の集落や高島を一望のものとみわたすことができる。又、遺跡の麓には池がある。

遺跡の概要 この遺跡は1982年、益田市教育委員会が国営農地開拓事業関連の道路建設に先立って発掘調査を実施したものである。検出された遺構は窯跡1基の他、土壌状遺構、掘立柱建物跡、溝状遺構等である。

窯跡は瓦陶兼用窯で、半地下式登窯とみられ西向き丘陵斜面の標高32~35mの位置に作られ、焚口と窯尻部分を結ぶ主軸はN-56°-Eをむいている。窯体は天井部分が崩落している以外は残存していた。規模は窯体の水平長さ6.34m、斜距離6.84mである。焚口の床面高さと窯尻の床面高さの差は2.78mである。

床のプランは舟の甲板のような形をしており、焚口付近の幅は1.3m、焚口から1.7mの地点で1.45m、最大幅は焚口から5.4mの地点で1.78mある。それから奥は次第にすばまる。

窯体の横断面形状はかまぼこ形に近いが、床面は中央がくぼみ、側壁は中ぶくれしている。窯体の縦断方向の傾斜は燃焼室で4°、焼成室では13°~26°、窯尻に近いほうでは45°と急傾斜となっている。そして、急傾斜部分では瓦陶の素地を置きやすいように多数の凹みが作られている。床面には土塗りによるかさあげはない。

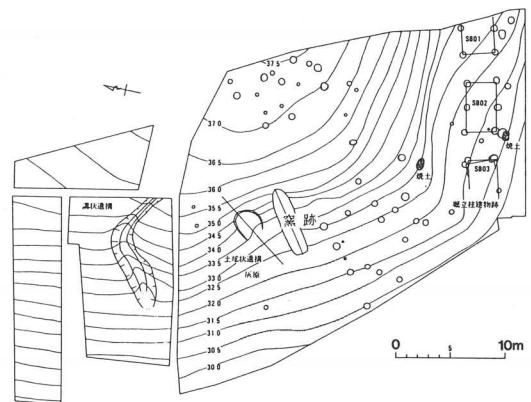
灰原は7.5m×12.5mの広がりをもっており、2~3層の堆積がある。このことから窯の稼動期間は短いと思われる。

土壌状遺構は窯跡の北側につくられ、3.5×4.6mの長円形で深さ50~60cmあり、炭化物に混じって須恵器片が3層堆積していた。掘立柱建物跡は窯跡の上方の丘頂部や南側の斜面に認められた。南斜面の平坦地で検出されたものは1×2間のものが直列に3棟並んでいるかのようである。溝状遺構は窯跡の北側で検出。

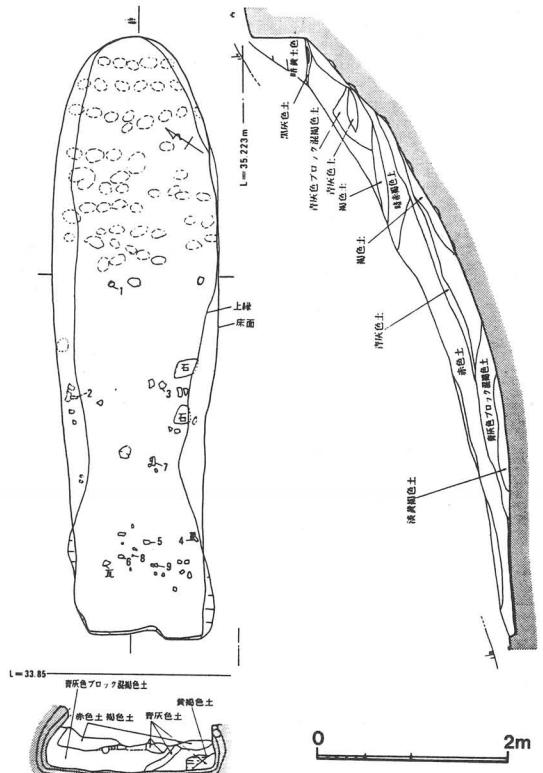
出土遺物 遺物は破片ながら7000点以上にのぼるが、それらは須恵器、瓦、土馬である。須恵器は蓋、坏、壺、高坏の4種類があり、蓋は4類、坏は5類、壺は4類、高坏は3類に分けることができる。いずれも地域色の強いものである。瓦は平瓦・丸瓦・隅切瓦の3種類で、木片による削りや刷毛目による調整で須恵器製作と同じ手法である。須恵器の編年の位置は益田市西平原町の芝、中塚両窯跡出土の須恵器よりも新しい。

(勝部 昭)

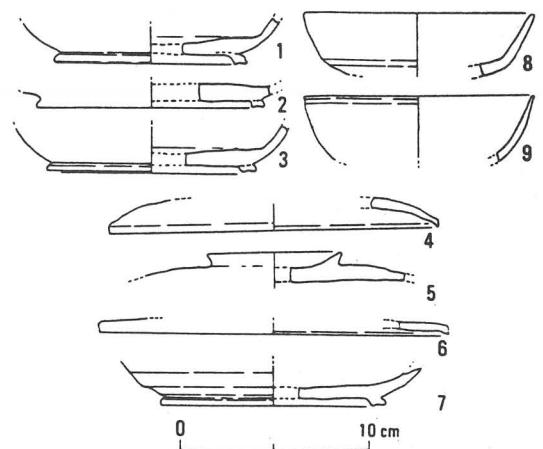
文献 益田市教育委員会『本片子遺跡・木原古墳』昭和57年



本片子遺構配置図



本片子窯跡実測図



窯跡内出土の須恵器

石見国分寺瓦窯跡（o 33）

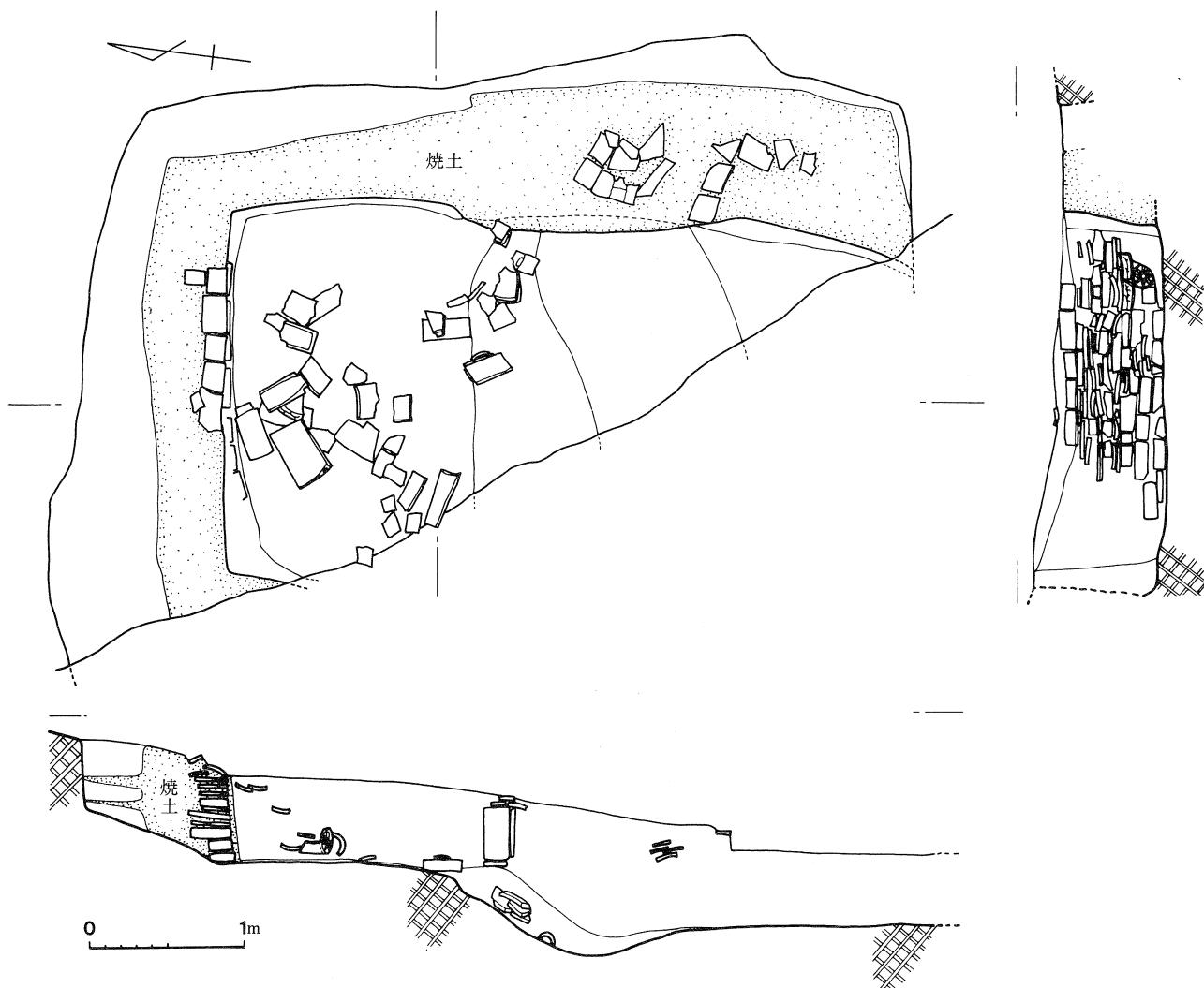
浜田市国分町国分

所在 浜田市国分町の日本海を展望できる標高約 54 m の丘陵上にある。同一丘陵上北東約 90 m には国指定史跡石見国分僧寺跡、さらにその東約 350 m には石見国分尼寺跡があり、瓦窯は両寺院の瓦を生産していたと考えられている。

遺跡の概要 瓦窯は昭和 41 年、丘陵の農地造成中に発見された。工事によって 1/3 を失ったが、近藤正氏によって調査がなされ、残存部は昭和 42 年に県指定史跡として保存がはかられた。

窯の構造は、半地下式の無状式平窯と考えられている。窯の主軸はほぼ南北で、南側の焚口付近を失っているがもとは全長 5 m ほどあったと思われる。焼成室は幅 2.4 m、長さ 1.5 m、現存する高さ 0.6 m ある。床面は水平である。燃焼室は焼成室床面より 0.6 m 低く、U 字形に掘りくぼめた段でわけられている。天井部は落下しており不明であるが、スサ入り粘土と瓦片で固められていたようである。焼成室の奥壁は下方に 2 ~ 3 段壇を、その上に軒平瓦、軒丸瓦、平瓦を小口積み状にして構築されている。

遺物 瓦窯出土の瓦は、軒平瓦 2 種、軒丸瓦 1 種、平瓦、丸瓦、壇がある。軒平瓦 A 類は T 字形の中心飾りから左右に蕨手状の均整唐草文を配したもので、平城宮式軒平瓦の流れをくむ瓦当文様と考えられる（1）。顎は曲線顎である。この軒平瓦 A 類とセット関係にあったと考えられる軒丸瓦が焼成室の奥壁に使用されている。図面をみる限り 8 葉単弁蓮華文を瓦当文様としているようである。同範と考えられる石見国分寺採集資料をみると、瓦当径 16 cm、厚さ 3.7 cm の一本作り



石見国分寺瓦窯跡実測図（近藤正原図）

のものである。中房の径は約 3 cm で蓮子は 1 + 4 である。軒平瓦 B 類（2）は、複弁を意識した 8 葉蓮華文を 3ヶ所に、その間に 3 葉文を 2ヶ所配した瓦当文様で、新羅、又は高麗のそれに系譜をたどることができる。これとセット関係にあったと考えられる軒丸瓦は、複弁を意識した 6 葉蓮華文を珠文で囲む瓦当径約 17 cm のものである。瓦当の厚さ 2.4 cm と薄く、丸瓦部を若干瓦当裏面にくい込ませる手法である。平瓦は全て一枚作りである（3）。凹面には糸切痕・布目痕が残り未調整で、凸面は側面に平行な縄目叩き痕のものばかりである。丸瓦は全て玉縁式で、又、側面に分割痕がみられる。尙ほ木型で作られたものである。

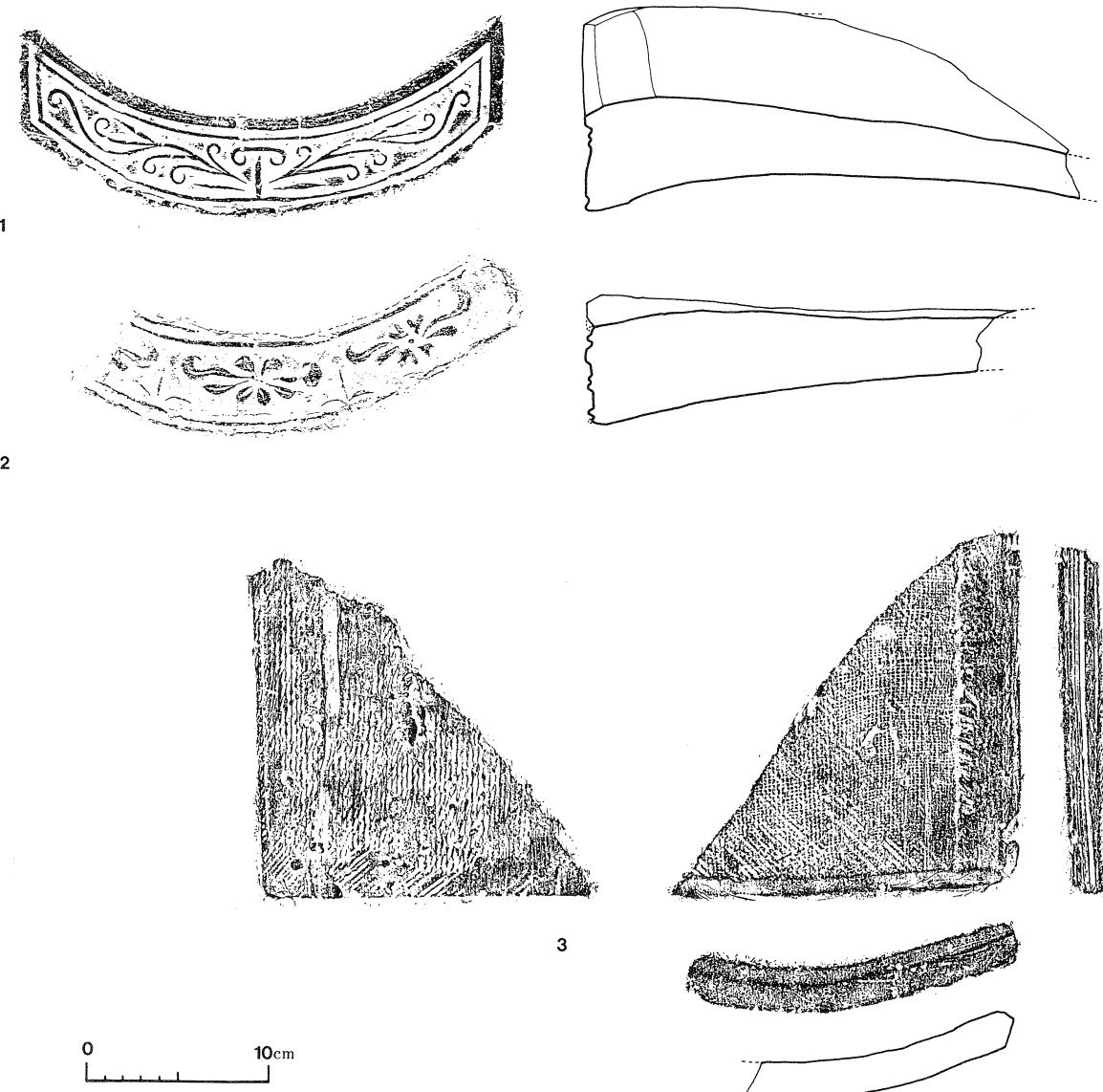
瓦窯内では A 類を構築材として、B 類を焼成しているらしく、石見国分寺瓦の変遷を知る手がかりとなる重要な遺構である。
（内田律雄）

文献 濱田耕作・梅原末治『新羅古瓦の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第 13 冊 昭和 9 年

近藤 正「古代・中世における手工業の発達——山陰」『日本の考古学』VI 昭和 42 年

大川 清『日本の古代瓦窯』昭和 47 年

石井 悠「石見国分寺瓦窯跡」『島根大百科事典』昭和 55 年



石見国分寺瓦窯跡出土古瓦

白上焼一野田窯（t 34）、吹金原窯（t 36）—

益田市白上町

歴史的背景 白上焼は県西部では唯一磁器を焼いた窯であるがその変遷については良く整理されていない。

伊藤菊之輔著『山陰の陶窯』では、肥前杵島郡の職人野田荒吉が天保8年（1837）に長州萩に移り、安政3年（1856）白上皿山の陶土を探り、萩で試焼きをしたところ製作に自信を得たので、同5年（1858）白上に移住して製陶所を設けたのが始まりという。

この時期の磁器窯の開窯は出雲の久村焼の例を上げるまでもなく、山口県萩市の小畠焼や豊浦郡豊北町滝部の境下窯、さらに近い所では阿武郡田万川町の江崎皿山焼などがあり、1820年代には日本海沿岸の港を拠点に磁器窯が勃興する。白上焼の開窯も当時の歴史的背景、特に、それぞれの藩内で増大する肥前・京焼

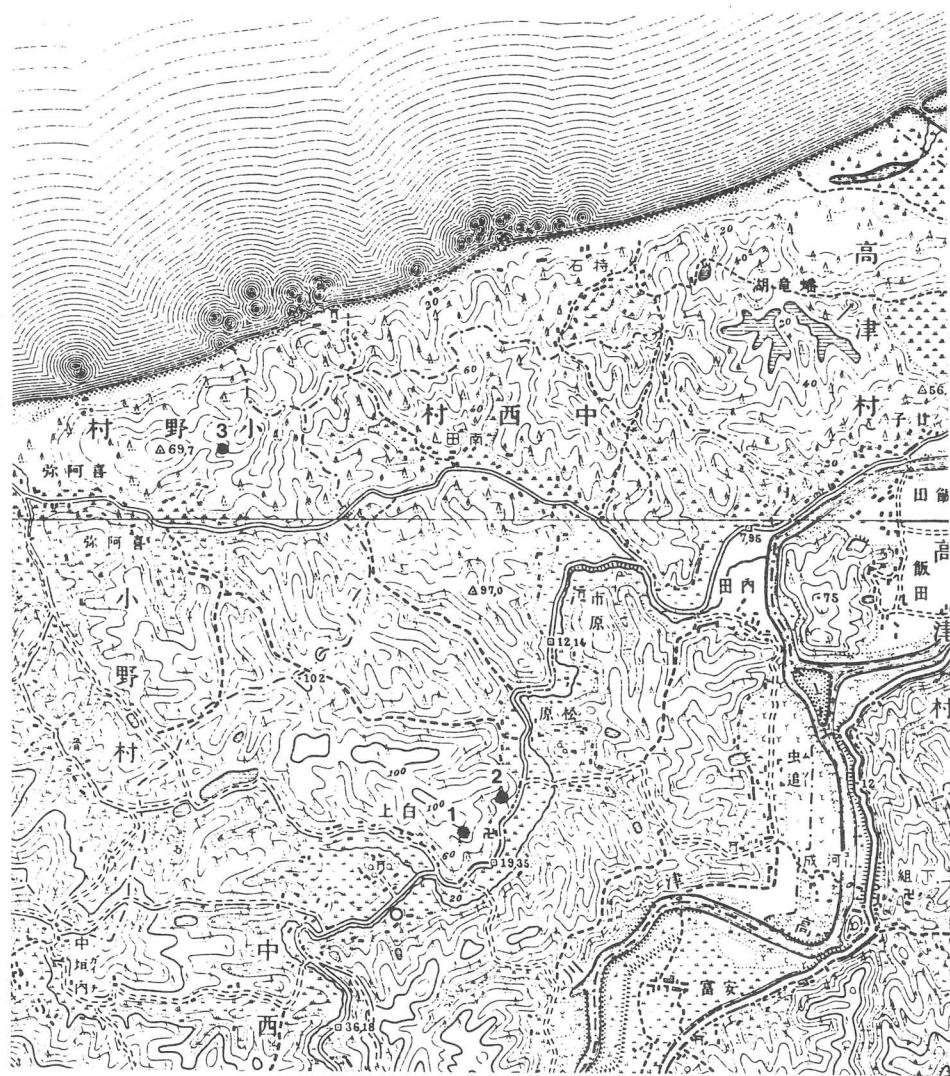
系の磁器の需要を、自国で賄い、一つの産業として育成しようとする希求によってもたらされたと考えられる。

津和野藩に製品を献上して好評を博し、文久2年（1862）から翌年にかけて、藩より資金200両を貸付けられたのはそういう事情による。藩主亀井茲監の巡視もあり、慶応3年（1867）生産の能率を上げるために、藩士宮本友右衛門を役人として皿山に出むかせ、且つ別に山1ヶ所を下附した。

しかしながら、九州から買入れた釉薬石が思うに任せらず、藩の奨励にかかわらず多大の損失を招いた。荒吉は苗字を許されて皿山支配人を命ぜられ、かつ諸物価騰貴のため事業困難を歎願し、さらに資本金を導入されるなど、物心両面の援助を得たが明治維新後閉窯したと、伊藤は記している。

また、これとは別に矢富熊一郎は『益田市誌』で、藩主が津和野城下の水津孫兵等に売捌方を命じたこと、負債の消却ができないうちに荒吉が倒れ経営が困難になったため、明治2年（1869）御用方が皿山を巡視し資金援助がなされ、後継者野田庄太郎は長屋窯を新設し、白上焼がやや回復の兆を見せたこと、明治5年（1872）皿山の経営は本家野田庄太郎と分家福井元蔵に分かれたが、明治20年から24年にかけて両名が死去したので、庄太郎の子惣太郎が後を継いだこと。しかし事業の挽回は難かしく、明治35年（1902）資金不足と販路縮少にたたられ、荒吉以来3代のこの事業も廃止になったことを論じて、明治以降の記述に伊藤とは大きな違いをみせている。

さらに平田正典は、『石見粗陶器史考』で喜阿弥焼についてふれながら、喜阿弥焼3代亀次（文久3年～昭和13年）の弟政



1 白上焼野田窯 2 白上焼吹金原窯 3 喜阿弥焼

次は、後に中西の白上焼の跡を再興して磁器の作成にとりくんだが失敗に終ってしまったといっている。

伊藤は『山陰の陶窯』の白上焼の頃に昭和23年（1948）に同地の村上伍介が復興経営して日用陶器を作ったが25年頃廃止したと追加している。

以上の点を要約すると、従来白上焼と呼ばれたものには、肥前から来た野田荒吉の流れと、喜阿弥焼の吹金原の流れと、第2次大戦後に村上伍介の経営になった流れの3つの系統があったことがわかる。なお詳細な調査が必要とはいえ、いずれもこれらはこの白上周辺の陶石・粘土などの豊富な窯業原料を基にしているのであって、白上焼の総称の下に取扱かって問題なかろう。

所在 益田市の西南部にあたり、白上川流域のめぐまれた陶上地帯に囲まれている。現在も羽原の丘陵では陶土を産出して主に瓦を生産している。白上川は下流で高津川と合流するが、その中流域にあたる白上は古来この流域の中心部をなしたところである。現在中西中学校の立地する白上の丘陵は白上川に面して広い平坦面を有しているが、その中学校と谷をはさんだ隣の丘に一基の窯（地元では野田焼と呼んでいる）、さらに妙雲寺の北東側の新道と旧道の合流点の北側民家に接した竹林に、一基の窯（吹金原焼）が存在している。伊藤のいう村上伍介の窯は、これらとは場所が異なり、白上川添いに設けられている村上酒場の倉のところに築かれていたという。

遺跡の概要 便宜上白上町岡の通称皿山の窯、すなわち野田焼と呼ばれているものを白上焼野田窯（t 34）と仮称する。また妙雲寺の北東にある松原の城市久則所有地の窯を白上焼吹金原窯と仮称する。

白上焼野田窯は、北西—南東を軸にした全長が30 m位の規模のもので、窯の下部構造は現時点では良好に遺っている。焚口附近はやや不明の点もあるが焚口部を含めて7室が認められる。窯の幅は全体で6.60 m、室の内側で横幅4.15 m、奥行3.40 mで火床部分の奥行が壁厚も含めて1.07 mである。通焰口部の高さは72 cmあり、18個のタテ23 cm、ヨコ10 cmの口が床から40 cmの高さに15 cmの間隔で配置されている。また周辺には窯の南西側に土手状の高まりがあり、焚口の左手には谷間に通ずるような人工の窪みがあって、この谷には自然涌水によるせせらぎが見られる。また窯の右手下の一
段低い場所は、2間×3間の細工小屋があったといい、今も畠としてまとまった区画がのこされている。なお、この畠の土を掘ると白っぽい粘土のような土が出るという白上町藤井愛の指摘もある。

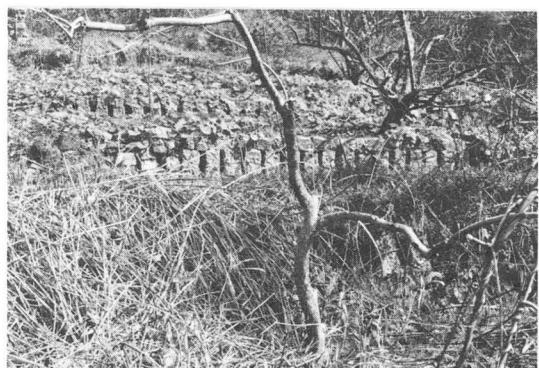
この窯からは碗・皿・酒器・仏花瓶等が採集された。いずれも磁器製品であり、非常に濃いコバルト顔料の発色が目立っているが、それが印判手によっている点が特徴である。竹に雀や菊など花鳥文様が多いようであるが、仏花瓶には手描きで蓮が施してある。また、荒吉が大平物を製したことなどが『益田市誌』に掲げてあるので、精査すれば他の器種も確認されよう。

白上焼吹金原窯（t 36）は北々西～南々東を軸にして焚口（燃焼室）を含めた7室が完存している。窯の全長は18.80 mであるが煙出しの上手の窪地を含めれば22.50 mあり周辺に土手がめぐっている。焼成室内部は幅4.75 m、奥行は火床が36 cm製品を置く場所がさらに段で分かれており手前が1.82 m、奥が95 cmで壁によって次の室の火床に通じる形式になっている。火床の段が38 cm、奥の段が23 cm、天井は1.97 m、通焰口は19個でタテ25 cmヨコ6 cm、また出入口は幅が55 cmで高さが95 cmある。

この窯の原料は窯の左手一帯に産出する陶石が使われていたと、白上町の福岡よし吉が明言している。同家の裏山にあたり確かに採掘の跡がある。また対岸を含めこの周辺で採取されるもののようにあ



白上焼野田窯全景



白上焼野田窯部分

る。聞き取り調査で、福岡はこの窯は小野村の吹金原マサイチがやつて来て始めたこと、またその子シゲイチが跡を継いで操業していたという。廃窯になったのは第2次大戦が激しくならないまでのことであるといい、松原の分家吹金原ミノルも戦後はもち論焼いていない、中止したのは戦前であるといっている。

さて、この窯の製品は周辺の民家に今なお多く見られるが、確実に磁器を焼いていて、本家筋にあたる喜阿弥焼とは異なっている。製品は碗・皿・徳利・大徳利・おろし皿・大鉢等が磁器製品で一部すり鉢・油徳利のような大徳利に陶器製品が見られる。磁器は印判手によって牡丹に蝶、松、菊に蝶、太公望、打出の小槌、竹に雀が描かれる他、コンニャク判のようなスタンプによる文様も見られる。またコバルトの発色は鮮明であるが野田窯ほど濃くなく明るいもので、他に緑・茶・ピンクの釉によって文様の一部が表わされたり、緑一色によって文様が描かれる点に特徴がある。

課題 以上白上焼について判明した点を述べた。江戸時代後期の山陰地方における磁器製品の需要の増加を背景として、津和野藩の援助を受けながら操業した点は、出雲・長門の磁器窯に共通するもので、他地域の窯跡が少しづつ消滅していくなかで、なお作業場跡など周辺施設を含める形で遺構が良好に遺っている点は注目される。

明治2年野田庄太郎の新設したという長屋窯（弥富『益田市誌』）と元の野田荒吉の窯の関係。新設したというのは全く別な場所に新たに窯を築きなおしたのか、そうではなく野田荒吉が明治維新後閉窯（伊藤『山陰の陶窯』）したものに手を入れて経営実態が変わったという意味での新設か。

また、明治5年皿山の経営は本家野田と分家福井に分かれたとされるがその内容、また吹金原政次は仮称した吹金原窯を築いて自分で始めたのか、従来の野田・福井の系統の窯で廃窯になったものに手を入れて操業を始めたのか。

遺っている2基の窯跡とこれらの記述との整合性はこれからの課題である。いずれにせよ文化財としての見地から窯跡自体の精査が早急にのぞまれる。

（村上 勇）

文献 弥富熊一郎『益田市誌』昭和50年

伊藤菊之輔『山陰の陶窯』昭和44年

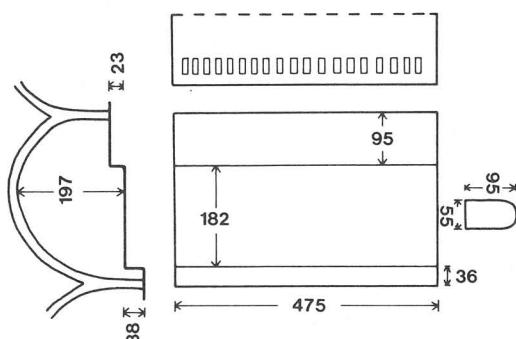
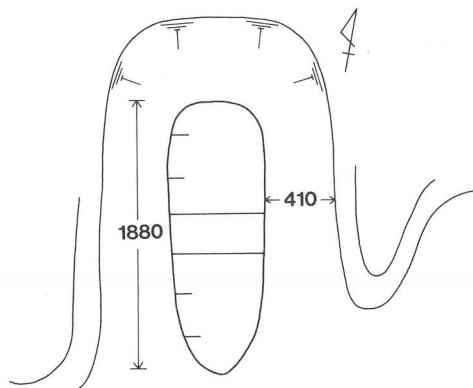
平田正典『石見粗陶器史考』昭和54年



白上焼吹金原窯全景



白上焼吹金原窯部分



白上焼吹金原窯略図

喜阿弥焼（t 5）

益田市喜阿弥町

歴史的背景 益田市域の窯は温泉津町以西に分布する石見焼の一角を荷ってきた。今回の分布調査によって多くの窯跡が知られるようになったが、その実態の詳細については依然として判然としない。しかしながら今回の分布図と『石見粗陶器史考』（平田正典著 昭和54年）という好著を得て、石見の焼きものの大体の様子と、個別的には不明の点が多くあった益田市域の窯場の歴史的な活動についての解明の糸口が見いだせたといえる。

特に今回の調査の結果判明した高角山周辺の窯及び益田競馬場内の江戸時代操業と考えられる窯は、その製品の存在と相俟って非常に興味をそそられる。前者の中の一基は煎茶趣味によって生み出された朱泥様の茶器を焼いた可能性が高く、後者は山口県の須佐唐津や佐賀県有田周辺で多く焼かれた擂鉢と同種の製品を焼成している。しかしながらそうした窯の資料は非常に少ないので、ここではその変遷の多少が知られる喜阿弥焼をとり上げた。

喜阿弥焼の窯は安政元年（1854）頃に江津市二宮町神主（那賀郡神主村）出身の吹金原繁蔵によって開かれた雑器窯である。繁蔵は文政8年（1825）生れで、16才の時萩の窯に弟子入りして4、5年修行したという。後、嘉永の初め頃に飯浦町で一時開窯したことがある。

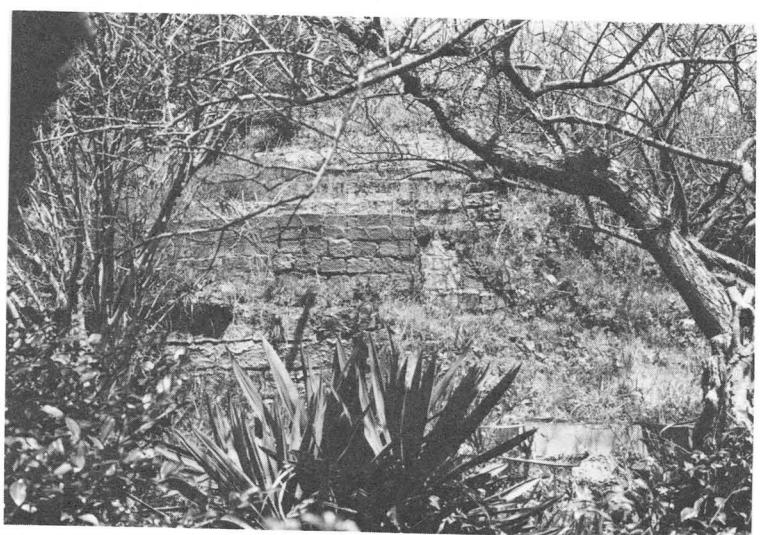
安政の中頃、津和野藩の御用窯となって唐津風（萩、須佐風）の雑器を焼いたといい、資金の援助を受けていたことを示唆している。繁蔵は手細工品も上手で橋のランカン・舟・鬼面・大蛇等も焼成した。後に国蔵・亀次・関次と継承されて、飴釉を基調として高取焼風の釉掛けが行なわれ、荒っぽい点がローカルカラーとして尊重された。製品は壺・甕の他に土瓶・行平・擂鉢・火鉢・土管・植木鉢・焙烙・火消し壺・らっきょう壺と藩の御用の茶器類・湯呑・急須・花瓶あるいは漁師の注文による漁網の重りまでありとあらゆるものを焼いた。土は窯の上の山



喜阿弥焼窯跡遠景



喜阿弥焼窯跡部分



喜阿弥焼窯跡部分

の赤土と近くの持石山の白土を器種によって使い分けた。

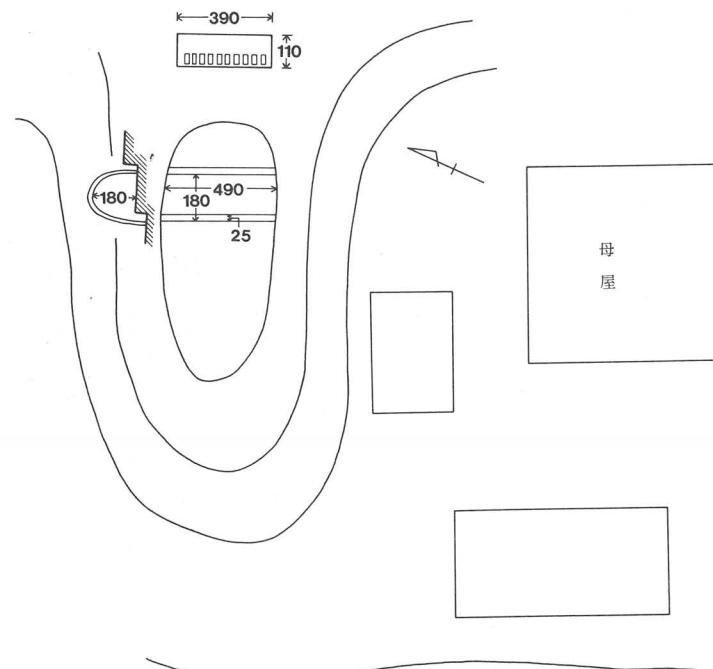
昭和初期に経営が不振に傾いたので、昭和7年頃益田の右田紀元が吹金原関治とはかって挺入を行い、「雪舟焼」・「喜阿弥焼」の印を茶器類や花器・湯呑・急須などの小物に押すようになった。製品は極めて質朴で、昭和15年(1940)に来訪した柳宗悦の推奨を受けて注目をあびたが、一貫して雑器を焼く窯としての使命を果たし昭和20年(1945)に廃窯となった。

位置 益田市の西、喜阿弥町の海岸砂丘上の松林の中にある。現在は国道191号線が海岸沿いを走るが、かってはこの窯の南側を通じる道が幹線道路で、益田市と山口県田万川町・須佐町を結んでいた。窯は海岸砂丘の基底層としてのくされ礫層上にあり、またここに含まれる粘土を原料としていた。

概要 窯の全長は約23mで巾約13mの尾根上の所に築かれている。平田は「窯は大口の外に9室からなっていて一棟である」としているが今は煙出し近くの2室だけ天井が遺っており、他はとりはらわれて床構造部分だけであるが9室まで確認できない。室内は幅4.90m、奥行1.80mで火床部分幅が25cm天井の高さは1.80mある。

遺物については物原が不明で採集できなかった。ただし窯道具(ヌケやハマ)などは現吹金原家の石垣などに転用されていて概要を知ることができる。また製品については伝来品が東京の日本民芸館や地元に遺されているので参考になる。

課題 喜阿弥焼は80年間にわたって吹金原家が操業にたずさわっており、母屋部分は近年改築されたが、なお周辺の作業小屋は昔時の様子が把握できこうした部分の記録保存も今後はなされる必要があろう。
(村上 勇)



喜阿弥焼窯略図



喜阿弥焼

安田焼（K 1）

能義郡伯太町安田字長田

歴史的背景 同じ伯太町母里周辺の窯より若干遅れて、天保年間に宮本茂平が布志名の職人を雇って開窯した。母里の卯月窯でも布志名の職人を傭入れているし、下天馬の窯でも明治前半代に盛んに布志名の黄釉物と同様の製品を焼いたように、この一帯は特に布志名焼の影響の強い地域である。特に、文政から天保期にかけての需要の増大期に各地に築かれた窯の様相を窺い知るに条件が良い。安田焼は台所用品を主に、花器・香合等の美術品を作り、特に青色の発色が好評を博した。土は円部替地から掘り出し、因幡の因久山や大東の海潮からとりよせた釉薬で黒・白・黄・青釉を施した。窯は茂平—光蔵—惣三郎と続いて明治20年頃廃窯となった。

所在 伯太川をさか登って平野も狭小になりかけた左手になお安田の沖積地が拡がり、安田宮内を経て米子に抜ける街道がある。窯跡は安田長田の丘陵を南に廻り安田八幡宮の東側の谷に入つて左手の中間あたりにある。

遺跡の概要 窯は民家の上手の通称横手という場所に比較的良好な状態で遺っている。周辺を切りひらいて谷間を全体的に平坦に近く造成し、中程に全長18メートル、幅約4メートル30センチの窯を築いている。窯の右手がやや高くなっているのは他の窯と同様である。一段低い場所に水溜め場（池）が遺っている。遺物は窯の右手、一部道路に削平された部分でも採集でき、黒釉碗・壺、青釉碗・鉢、鐵釉徳利、鐵釉壺・鉢・こね鉢、すり鉢、黄（灰）釉火鉢、鐵釉に黒釉をかける大壺など多種類の製品を焼いており、特に黒釉碗・青釉碗などはいわゆる布志名焼と同様のものであつて、判別は困難なものである。また、総じて胎土も緻密で薄手のものも多く雑器としての出来は良い。

課題 県内の多くの窯跡が記録も残さないまま消滅する中で、この安田焼の窯跡は、江戸末から明治中頃までの出雲地方特有の雑器を焼成した窯としてなお当時の状態を良く留めているため、窯跡と焼成された製品を中心とした早急な調査が望まれる。当地方では現在なお母里焼稻垣窯がこの周辺地方の要請で雑器を焼き続けており、安田窯を介在せざれば相当明確にこうした歴史の光の当たりにくい、しかも生活の中に根強く息づいた窯業製品と操業の実態を描き得るようになろう。

（村上 勇）



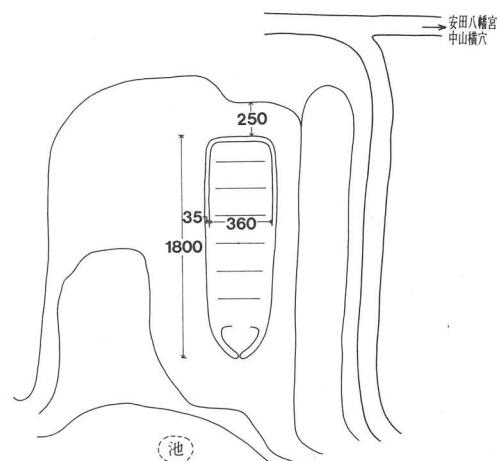
安田焼窯跡遠景



安田焼窯跡近景



安 田 焼



安田焼窯跡略図

塩谷焼（L 1）

能義郡広瀬町塩谷

歴史的背景 嘉永年間（1848－54）開窯といわれるが当初の様子は詳かでない。陶工として但馬出石の佐竹春吉がいたという。元治元年から白雉窯と通称。

近来のものは明治4年（1871）に秦瀬兵衛が経営者となって但馬の出石から陶工又助・新兵衛等10人を招き広瀬町塩谷に開窯したものである。製品は初め草花を描き、黒褐色や緑の釉をかけたものであったが、京都から華中亭道八の門人沢道を招いて染付磁器の優品を産するようになった。

「白雉製沢道造」「於塩谷沢道」銘の作品が伝えられており、山水を描いたものに「鶴友画」「鶴友逸作」銘をかいたものがある。「京山与八」「雲廣与八」銘の小品は当時から高価であったといい、これは京都の陶工与三平の弟子であり、「但石吉村永久」銘の精巧な絵付徳利は但馬出石の絵付師吉村永久の作である。無銘の日用製品はもち論多く中でも燭徳利は有名である。

明治17年（1884）に廃窯になったが、製品は近郊で今でも見ることができる。島根の他の磁器窯と異なり但馬出石の陶工が多く見られることは鳥取県岩美町の浦富焼と同様であって、時期的にも共通する点があつて注目される。

所在 窯は塩谷川が飯梨川と合流する手前の山側・広瀬町塩谷の舌状に延びた小丘陵の中腹に立地する。窯のある丘陵の先端が飯梨川の改修工事によって昭和60年度に削平されたので場所はわかりやすい。なお、この工事で物原が消滅した。

遺跡の概要 窯の全長は約19.20mで特に幅が6.30mもある広いもので全体の様子は今でもよく把握できる状態にある。燃焼室を含め5室が確かめられるが最奥の室で火床を除き3.50m、奥から2番目の室で通焰口部分を含め3.75mである。奥部の窯壁は厚さ60cmあるが岩石を切り出したもので構築してあるのが特徴的である。窯の右手には各室に応じた平坦面があり、煙出し部は2.40mの溝状部をへだてて後の比高3.50m程の切りたった崖状部に面している。

採集される製品は雑器ばかりであり、染付の徳利や特徴ある外反する白磁小皿や草花を染付で描いた碗や御酒徳利や鉢等がある。

課題 以前より良く知られた窯で、町の中心部からも近い所にありながら、塩谷川改修工事などに関連して調査の手が加わらなかったのは残念なことであった。現在、窯から見上げられる富田城周辺の遺跡整備の策定計画がなされているのであるから地域内のこうした遺跡も含めて考えたいところである。また、伝世する「沢道」銘の大皿や徳利・碗などは言われるような優品ではなく客観的に見れば雑器の中に含まれるものであり、そうした面からみた総体的な検討がなされなければ塩谷焼の歴史的な意義について検討しても片手落ちになろう。

（村上 勇）

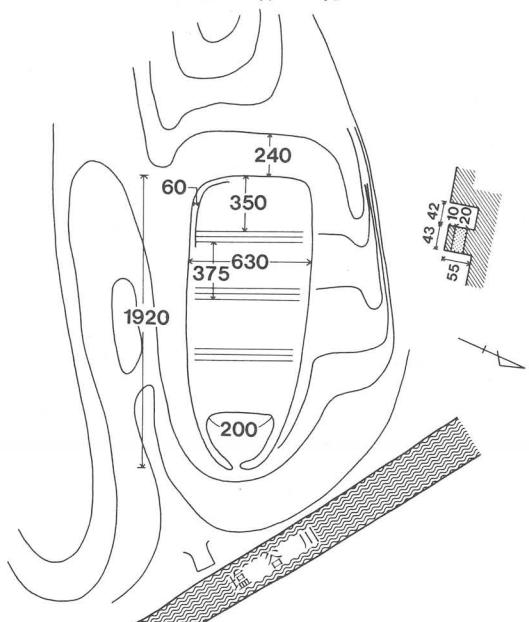
文献 伊藤菊之輔『島根の陶窯』昭和42年。原 宏「島根のやきもの」『日本やきもの集成』8昭和56年



塩谷焼窯跡遠景



塩谷焼



塩谷焼窯跡略図

才の神焼（L 3）

能義郡広瀬町菅原字柿根

歴史的背景 小規模な雑器窯で『広瀬町史』上巻（昭和43年）に記載がある。聞き書きを併記した体裁で不整合な内容であるが、大概明治21年前後から足立仲右衛門が窯元になって開かれたもので、職人は田中愛助、他に布志名から来たものもいた。才の神焼は明治15年から22・3年頃まで焼いていた越峰焼の道具を譲り受けて始めたという。正確な年次は別にして田中愛助は越峰焼に従事した布志名焼職人であり、この窯には石州から来た職人もいた。したがって越峰焼と才の神は距離的にも近いところであるが系譜的にもつながりがある。

明治27・8年頃あるいは大正4・5年廃窯説があって、初めは藍甕を焼き、のちには黄釉のボテボテ茶碗・徳利・植木鉢なども焼いたという。

所在 飯梨川をさか登ると山佐川とわかれて布部方面をめざす。旧菅原校は菅沢橋を渡った左手である。かつて越峰焼があった跡は今はわからない。才の神焼は橋を渡って左手、国道432号線と川をはさんだ反対側の道を下流に向い、菅原の集落が途絶えるあたり右側に少し突出した丘陵があり、50m登った畠の上に窯跡がある。

遺跡の概要 全長8m、幅3.40mで小規模な窯である。焚口の室を入れて4室であろうと思われる。窯の左手に幅1.40mの窪地と3.30mの幅の高まりがあり、その下段は平坦地で窯の右手の平坦地とあわせた作業場の可能性が高い。

遺物は窯道具の他、すり鉢・壺・こね鉢・榊立や一部瓦のひずんだものがあり、越峰焼同様周辺の需要に応じて瓦（鉄釉をかけたもの）も焼いていたようである。物原の一部を見る限り全くの雑器窯である。

課題 3キロメートル下流に八幡焼が現在も操業しているが、この窯は江戸時代の享保年間の開窯であるという。ただし、谷の向い側の岡に全く知られていなかった窯が運動公園造成中に発見されたように遺された文献資料だけでは解明できない点も多い。才の神焼窯跡が周辺の窯跡の考古学的調査により、今後この流域の生産と流通のあり方等を歴史的に解明することもできよう。（村上 勇）



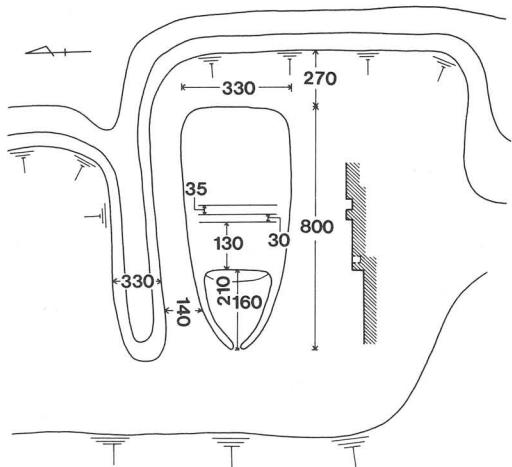
才の神焼窯跡遠景



才の神焼窯跡近景



才の神焼



才の神焼窯跡略図

島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅲ
窯業関係遺跡

昭和 60 年 3 月 30 日 発行

発行 島根県教育委員会
松江市殿町 1 番地

印刷 株式会社 報光社
平田市平田町 993